

[68・ウ]

【翻刻本文】

葵 [割・源廿一 廿二オ]

桐壺のみかどの御世、朱雀院にかはり、春宮〔傍・春＝冷〕の御うしろみは源に聞えつけ給ふ。六条の御休〔六＝合点〕所は、源のうと／＼しくし給へば、姫君、齋宮にみ給ふにことつけて、伊勢へくだりやしなまし、とかねてよりおぼしけり。御禊の日、上達部、数さだまりてかたちあるかぎり、したがさね、うへのはかま、

【現代語訳】

葵 [「光源氏」が二一、二二オの時]

「桐壺帝」の世代から、「朱雀帝」(朱雀院)の世代へと交代し、「桐壺院」は春宮(後の「冷泉帝」)の後見人を「光源氏」に依頼します。「六条御息所」は、「光源氏」の態度がよそよそしく冷たいので、姫君(六条御息所の娘)が、齋宮になることを理由にして、自分も一緒に伊勢へ下ってしまおうかしら、と以前から考えているのでした。葵祭の御禊の日は、上達部の中から、規定の人数で容姿のりっぱな人だけを選び、束帯の下に着る衣服や、一番上にはくパンツ、

[69・オ]

【翻刻本文】

馬、くらまで、みなとゝのへたり。源大将も供奉也。一条のおほぢより、所々の御さじき、心々にしつくし、いみじき物見也。大とのゝ君は〔傍・君＝葵の上〕なやましけれど、「あやしき山がつ、遠き国より、めこを引ぐしまうでくなるを」とて、にはかに見給ふ。日たけ出給へば、ひまもなう車たちわたりたるをさしのけさする中に、あじろのふるくよしばめる車ふたつあり。「これは、さやうにさしのけなどすべきにはあらず」と、口ごはく手ふれさせず。「是は齋宮の御母みやす所のしのびて出給へる也」といふ。あふひの上の人々、「さないはせそ」とて、御車どもたてつゞけ

【現代語訳】

馬や、鞍まで、すべて整えます。(特別に)源大将(「光源氏」)も行列に加わります。《一条の大通り》に面した、あちらこちらの仮の見物席は、思い思いの趣向を凝らし、すごい光景です。大殿の君(「葵の上」)は具合がよくないのですが、若い侍女たちが、「身分の低い木こりや獵師でさえも、遠い国から妻子と一緒に

見物に来ますのに」と言うので、急に思い立って見物に行くことにします。日が高くなってから出発したので、(すでに通りには)隙間もなく車が立ち並んでしまっているのを《みんな立ち退かせる》

中に、《古くて趣のある牛車》が二つあります。

《その牛車の供の者》が、「これは、そのように立ち退かせなどしてよい車ではありません」と、

強く言い張って手を触れさせません。「これは齋宮の母である「六条御息

所」が内密に見物に来ている車なのです」と言います。《「葵の上」の供の者たち》

は、「(六条御息所の側に) そのように言わせてはならない」と(口では言いながらも)、車を立ち並べて

[69・ウ]

【翻刻本文】

つれば、人だまひのおくにをしやられて物も
見えず。しぢなどもみなをしおられて、人わ
ろう、何にきつらんと、くやしかへらんとし給へ
ど、とをりいでんひまもなし。をしけたれたる
ありさま、こよなうおぼさる。

かげをのみ みたらし川の つれなきに

身のうきほどぞ いとゞしらるゝ

まつりの日は、大とのには物見給はず。大将の君

は、彼御車の所あらそひ、いとおしうおぼす。

【現代語訳】

しまったので、「六条御息所」の車は後ろに押しやられて何も

見えません。牛車の踏み台などもすべて折られ、「六条御息所」は恥ずかしくて、

何のために来たのだらうと、悔しく思っ帰ろうとします

が、通りを抜け出る隙間もないのです。「六条御息所」はすっかり無視されてしまった

様子で、この上もなくみじめな気持ちになります。(そして、歌を詠みます。)

かげをのみ みたらし川の つれなきに

身のうきほどぞ いとゞしらるゝ

葵祭の当日は、左大臣家の方々は見物には行きません。大将の君(「光源氏」)

は、あの車の場所争いの出来事を聞き、「六条御息所」を気の毒に思います。

[70・オ]

〈絵1〉賀茂の新齋院御禊の日、葵の上の従者と六条御息所の従者が車争いをする場面

[70・ウ]

【翻刻本文】

源は二条院におはして、むらさきの上の御

ぐし、つねよりもきよらにみゆるをかきな

で、「けふはよき日ならんかし」とて、御ぐし、そぎ

給ふ。源、

はかりなき ちひろのそこの みるぶさの

おひゆくすゑは われのみぞ見ん
〈紫上〉ちひろとも いかでかしらん さだめなく
みちひるしほの のどけからぬに

【現代語訳】

《「光源氏」は今日は《二条院》にいて、《「紫の上」》の髪が、いつもより美しく見えるのを《かき撫でながら》、「今日はよい日だろう」と言って、《髪を削ぎます》。「光源氏」は、(次のように歌を詠みます)、

はかりなき ちひろのそこの みるぶさの
おひゆくすゑは われのみぞ見ん

(これに対して、「紫の上」は次のように返します)

〈紫の上〉
ちひろとも いかでかしらん さだめなく
みちひるしほの のどけからぬに

[71・オ]

〈絵2〉葵祭に臨み、光源氏が基盤の上に紫の上を立たせ、髪削を行う場面

[71・ウ]

【翻刻本文】

源はむらさきの上、ひとつ車にてまつり見給ふ。

上達部の車どもおほき中に、女車より扇を
さし出てまねく、引よせさせ給て、いかなるすき
ものならん、とおぼさるれば、源内侍、

はかなしや 人のかざせる あふひゆへ
神のゆるしの けふをまちける

〈源〉かざしける こゝろぞあだに おもほゆる
やそうち人に なべてあふひを

〈又内侍〉くやしくも かざしけるかな 名のみして
人のためなる 草葉ばかりを

葵の上は、めづらしき事さへ〔傍・事＝懐妊也〕そひて御なやみなれば、

【現代語訳】

「光源氏」は「紫の上」と、同じ車に乗って葵祭を見物します。
上達部たちの車がたくさんある中に、女車から扇を
差し出して招くので、「光源氏」は供の者に引き寄せさせ、どんな好色
な女だろう、と思いますと、それは「源典侍」なのです、

はかなしや 人のかざせる あふひゆへ
神のゆるしの けふをまちける

(これに対して、「光源氏」は次のように返します。)

〈光源氏〉

かざしける こゝろぞあだに おもほゆる
やそうち人に なべてあふひを

(すると、「源典侍」は次のようにさらに歌を詠みます。)

〈また、源典侍〉

くやしくも かざしけるかな 名のみして
人のためなる 草葉ばかりを

「葵の上」は、めったにない妊娠の苦しきまで重なってしまい、

[72・オ]

【翻刻本文】

源、心くるしうおぼして、二条院にて、御ずほうおこなはせ給ふ。物の氣、いきす玉などいふものおほく、さま／＼の名のりする中に、人にもさらにうつらず、つとそひたるさまにて、かた時はなるゝおりもなきものひとつあり。御休所へ源より御文あり。「日ごろあふひの御なやみ、すこしおこたるさまなりつる心ちの、俄にくるしげに侍を、えひきよかで」などあり。

〈御休所〉袖ぬるゝ こひちとかつは しりながら
おりたつたごの みづからぞうき

〈源〉あさみにや 人はおりたつ わがかたは
身もそぼつまで ふかき恋ぢを

【現代語訳】

「光源氏」は、心配して、二条院で、加持祈禱を行わせます。物の怪、生霊などがたくさん出てきて、さまざまに名乗る中に、誰にも乗り移らないで、ぴったりと「葵の上」に寄り添って、少しも離れることのない

ものが一つあります。(その頃、「光源氏」は「六条御息所」を訪問し、翌朝「六条御息所」の所へ「光源氏」から手紙があります。「このごろ

「葵の上」の病が、少し回復してきたような様子でしたが、急にまた苦しそうにしているので、どうしても目を放すことができなくて」などと書いてあります。

(これに対して、「六条御息所」は次のように歌を詠みます。)

〈六条御息所〉

袖ぬるゝ こひちとかつは しりながら
おりたつたごの みづからぞうき

(すると、「光源氏」は次のように歌を返します。)

〈光源氏〉

あさみにや 人はおりたつ わがかたは
身もそぼつまで ふかき恋ぢを

[72・ウ]

【翻刻本文】

物の気おこたらず、かぢの僧、声しづめて法花経よむ。

〈靈歌〉なげきわび 空にみだるゝ わが玉を

むすびとゞめよ したがひのつま

すこし御こゑしづまり給へれば、大宮、御ゆもてよせ
給へるに、かきおこされて、生れ給ぬ。〔割・是夕霧也〕山の
座主、なにくれの僧ども、したりがほにあせをしの
ごひまかでぬ。御休所、靈と成給へば、御ぞなども
けしの香にしみかへり。御ゆする参り、きかへなどし
給へど、おなじやうなれば、我身ながらうとまし
うおぼす。秋のつかさめし、あるべきとて、大いどの、
君達、参り給て、殿の内人ずくなゝるに、葵

【現代語訳】

物の怪による「葵の上」の病気はよくなり、加持祈祷の僧は、声を低くして法華経を読みます。

〈生霊の歌〉

なげきわび 空にみだるゝ わが玉を

むすびとゞめよ したがひのつま

(苦しそうな)「葵の上」の声も少し静かになったので、「大宮」(葵の上の母)が、薬湯を持って来させているときに、「葵の上」は人々に抱き起こされ、まもなく男の子が生まれました〔これはのちの夕霧です〕。(無事に出産も終わり、)比叡山延暦寺の最高位の僧侶や、誰それといった僧たちが、得意な顔で汗を拭いながら退出します。(物の怪の正体は)「六条御息所」が、生霊となって現れたものなので、「六条御息所」は自分の着物などに(加持祈祷の時に焼く)芥子の香がしみこんでしまっていたのでした。「六条御息所」は髪を洗い、着替えたりしてみますが、以前と同じような香りがするので、自分の身でありながら疎ましく思います。さて、秋の人事異動が、行われる予定なので、大殿(左大臣、葵の上の父)、その息子たちは、宮殿へと行きます。人の少ない左大臣邸で、「葵

〔73・オ〕

【翻刻本文】

の上、俄にむねせきあげて、内に御せうそこ、聞
え給ふ程もなくたえ入給ぬ。ゆすりみちて、い
みじき御心まどひ也。二三日、見奉り給へど、かは
り給ふ事どもあれば、鳥辺野にみて奉る。

〈源〉のぼりぬる 煙はそれと わかねども

なべて雲みの あはれなるかな

にばめる御ぞ奉るも、夢のこゝちして、源、

かぎりあれば うす墨衣 あさけれど

なみだぞ袖を ふちとなしける

菊の気しきばめる枝に文つけて、をきていに
けり。見給へば、みやす所の御手也。

【現代語訳】

の上」は、急に胸をつまらせませす。それを宮殿へと知らせる連絡が届かないうちに、「葵の上」は亡くなってしまいました。左大臣邸内は大騒ぎとなり、

邸内の人々はとても動転してしまいます。二、三日は、様子を見守りますが、「葵の上」の遺体がだんだんと変わっていくので、(火葬するために)鳥辺野へと連れていきます。

〈光源氏〉

のぼりぬる 煙はそれと わかねども

なべて雲みの あはれなるかな

鈍色の喪服を着るのも、夢のような心地がして、「光源氏」は、(さらに歌を詠みます。)

かぎりあれば うす墨衣 あさけれど

なみだぞ袖を ふちとなしける

(さて、その後)晩秋に咲き始めた菊の枝に結んだ手紙を、誰かの使者が置いて立ち去りました。「光源氏」がその手紙を見ると、「六条御息所」の筆跡なのです。

[73・ウ]

【翻刻本文】

人の世を あはれときくも 露けきに

をくるゝ袖を おもひこそやれ

〈源〉とまる身も きえしもおなじ 露の世に

心をくらん ほどぞはかなき

御法事など過ぬれど、四十九日までは、猶こもり

おはす。頭中将、

雨となり しぐるゝ空の うき雲を

いづれのかたと わきてながめん

〈源〉見し人の 雨と成にし 雲るさへ

いとゞしぐれに かきくらす比

わか君〔傍・わか=夕霧〕の御めのと、宰相の君して、大宮へ源より、

【現代語訳】

人の世を あはれときくも 露けきに

をくるゝ袖を おもひこそやれ

(この「六条御息所」の歌に対して、「光源氏」は次のように返します。)

〈光源氏〉

とまる身も きえしもおなじ 露の世に

心をくらん ほどぞはかなき

「葵の上」の法事などは過ぎていきましたが、「光源氏」は四十九日の法要まではと、まだ左大臣邸に引きこもっています。「頭中将」は、(亡き妹の「葵の上」を思い、歌を詠みます。)

雨となり しぐるゝ空の うき雲を

いづれのかたと わきてながめん

(これに対して、「光源氏」は次のように返します。)

〈光源氏〉

見し人の 雨と成にし 雲るさへ

いとゞしぐれに かきくらす比

(「頭中将」が帰った後、)若君(「夕霧」)の乳母である、「宰相の君」を使者として、「大宮」へ「光源氏」から、(歌が届けられます。)

[74・オ]

【翻刻本文】

草がれの まがきに残る なでしこを
わかれし秋の かたみとぞ見る
〈宮〉 いまも見て なか／＼袖を くたすかな
かきほあれにし やまとなでしこ

源より、あさがほの齋院の御かたへ、
わきて此 くれこそ袖は 露けゝれ
ものおもふ秋は あまたへぬれど
秋霧に たちをくれぬと きゝしより
しぐるゝそらも いかゞとぞおもふ
正日返て、源二条院にとまり給ふべしとて、人々
まち聞ゆ。「古き枕、ふるきふすま、誰と共にか」と、

【現代語訳】

草がれの まがきに残る なでしこを
わかれし秋の かたみとぞ見る

(これに対して、「大宮」は孫の「夕霧」を思い、次のように返すのです。)

〈大宮〉

いまも見て なか／＼袖を くたすかな
かきほあれにし やまとなでしこ

(悲しみの心が消えない)「光源氏」は、「朝顔の姫君」(朝顔の齋院)へも、(歌を詠みかけます。)

わきて此 くれこそ袖は 露けゝれ
ものおもふ秋は あまたへぬれど

(すると、「朝顔の姫君」は、次のように返すのです。)

秋霧に たちをくれぬと きゝしより
しぐるゝそらも いかゞとぞおもふ

四十九日も終わり、「光源氏」が今夜は二条院に泊まるつもりだということで、供の人々は二条院で待機します。(亡き「葵の上」と習字をした紙を見つけ、)「光源氏」は「古き枕、ふるきふすま、誰と共にか」と書いてある古い詩を題材にして、(次のように歌を詠みます。)

[74・ウ]

【翻刻本文】

なき玉ぞ いとゞかなしき ねしとこの
あくがれがたき こゝろならひに
〈又〉 君なくて ちりつもりぬる とこなつの
露うちはらひ いく夜ねぬらん

中宮の御かたに参給て、「思ひつきせぬ事共を」、
命婦の君して聞え給ふ。二条院にわたり給へば、
姫君〔傍・君＝紫上〕、いとうつくしく引つくるひておはす。ひさし
かりつる程におとなび、はぢらひ給へる御さま也。我御
かたにわたり給て、中将の君、御あしなどまいりて

おほとのごもりぬ。つれ／＼なるまゝに、紫の住給ふ
西のたいにて、碁うち、へんつぎなどしつゝ目を

【現代語訳】

なき玉ぞ いとゞかなしき ねしとこの
あくがれがたき こゝろならひに

(別の古い詩を題材にして、さらに「光源氏」は歌を詠みます。)

〈また、「光源氏」〉

君なくて ちりつもりぬる とこなつの
露うちはらひ いく夜ねぬらん

さて、「光源氏」は中宮（「藤壺」）に会いに行きます。「藤壺」は「悲しみの尽さないことですが」、
と「命婦の君」（「王命婦」）を通じて「光源氏」に伝えます。その後、「光源氏」は二条院に行きますと、
姫君（「紫の上」）が、とても可愛らしくきれいに身だしなみを整えています。長い間
会わないうちに大人っぽくなり、「紫の上」自身は恥ずかしがっている様子です。「光源氏」は自分の
部屋に入って、「中将の君」に、足などを揉ませてそのまま
寝てしまいました。することもなく物思いに沈む「光源氏」は、「紫の上」が住む
西の館に来ては、碁を打ったり、偏継ぎ（漢字遊び）などをしたりして毎日

〔75・オ〕

【翻刻本文】

くらし給ふ。おとこ君はとくおき給て、女君さらに
おき給はぬあしたあり。人々、「御心ち、れいならずおぼ
さるゝにや」となげくに、引むすびたる文、御枕もとに、

あやなくも へだてけるかな 夜をかさね
さすがになれし よるのころもを

其よさり、ゐのこのもちみ、まいらせたり。君、南の方
に出給て、惟光をめして、「此もちみ、かう数々に
所せきさまにはあらで、あすの暮にまいらせよ」と
の給ふ。「ねのこは〔傍・ね＝惟光詞〕 いくつかつかうまつらすべう侍らん」と
申せば、「みつが〔傍・み＝源〕 ひとつにてもあらんかし」とのたまふ。
少納言がむすめの弁をよびて、参らす。少納言は、

【現代語訳】

を暮らしています。ある日、男君（「光源氏」）は朝早く起きても、女君（「紫の上」）は
まったく起きてこない朝があります。「紫の上」の侍女たちは、「紫の上」の具合が、
悪いのではないのでしょうか」と思い嘆いています。すると、「光源氏」が結んで置いた手紙が、「紫の上」の枕元にありました。

あやなくも へだてけるかな 夜をかさね
さすがになれし よるのころもを

その夜、「光源氏」は亥の子餅を「紫の上」へ送り届けさせます。「光源氏」は、西の館の南側に出
て、「惟光」を呼び、「この餅のように色とりどりに
大げさにはしないで、明日の夕方に（結婚祝いの餅を）「紫の上」の所へ送り届けさせよ。」と
言います。「惟光」は、「明日は子の日、餅はいくつ作ったらよいでしょうか」と
言うので、「光源氏」は、「三分の一ぐらいでもよいだろう」と言います。

「惟光」は、「少納言」の娘である「弁」を呼び、(この餅を) 送り届けさせます。「少納言」は、

[75・ウ]

【翻刻本文】

かうしもやは、とこそおもひつれ、あはれにかたじけなく、先打なかれぬ。御父式部卿の宮にしらせてんとおぼして、御もぎの事おぼしまうくる。年かへりて〔年＝合点〕、ついたちの日は、院、内、春宮に参給ひ、それより大殿へまかで給へり。おとど、あたらしき年ともおぼさず。源は、若君のおよすけてわらひおはするも、哀におぼす。

あまとし けふあらためし いろごろも
きてはなみだぞ ふるこゝちする
〈大宮〉あたらしき 年ともいはず ふるものは
ふりぬる人の なみだなりけり

【現代語訳】

これほどまでも(「紫の上」のことを思ってくださいとは)、などと思いますが、身にしみてありがたく、何よりもまずうれしくて泣いてしまいます。さらに「光源氏」は、「紫の上」の父である「兵部卿宮」(式部卿宮)に知らせようと思い、「紫の上」の裳着(成人)の儀式を立派に準備します。さて、年が開けて、元日に「光源氏」は、院、帝、春宮の所へ行き、そこから大殿(左大臣邸)へ向かいます。「大臣」(「左大臣」)は、(妻の「大宮」とともに娘のことを思うと、)新年が開けたとも思えません。「光源氏」は、若宮(「夕霧」)が大きくなって笑っている様子を見て、うれしくも悲しい気持ちになります。(「光源氏」は「大宮」に歌を詠みます。)

あまとし けふあらためし いろごろも
きてはなみだぞ ふるこゝちする

(これに対して、「大宮」は次のように歌を返します。)

〈大宮〉
あたらしき 年ともいはず ふるものは
ふりぬる人の なみだなりけり